

空海とホワイトヘッドにおける位相的原理の考察

吉原 瑩 覚

「有機体の哲学」と自称して、西欧の伝統的な経験論と合理論との新しい総合を企図したホワイトヘッドの包括的形而上学体系は、その主著〈過程と実在 (Process and Reality)〉において詳論されている。すなわち、彼の形而上学においては、物理学の意味での「場の焦点的部分」を形而上学的に一般化し、意識の主体から物理的物体まであらゆる実在的事物を包括するために、西欧伝統の実体概念とは異なる、過程的出来事的な現実的機縁 (Actual Occasion) が世界を構成する究極的な実在としての現実的統体 (Actual Entity) であるという新構想が提示され、統一場の理論において、無数の「場 (field)」が重なりあい交互に作用しあうなかで、その活動の強烈な焦点的部分が従来の物質的実体に相当しているように、彼の「現実的統体」は、さまざまに「過程 (process)」の組織体 (有機体 organism) として完全に相互依存的な出来事 (event) である「現実的機縁」として考えられている。しかも自然を構成する多様な過程の交互作用は、高次の機能と

して人間的心性をも含むゆえ、人間的心性を高次の発現形態とする交互作用の類型が、あらゆる現実的統体に内在すると考えることによつて、物心一元的な世界把握が企図されている。彼の「有機体の哲学」は、徹底的に人間の経験を自然の内部の一事実として考える形而上学なのである。

ホワイトヘッドによれば、現実の世界は、その統一の中心を自己自身の内にはなく、諸多の機縁のなかに見出すのであり、世界の位相的統一点は、相互依存的な出来事としての一々の現実的機縁である。現実の世界は現実的機縁に相対的な世界であり、本質的には過程であり、その過程は諸多の現実的機縁の生成である。現実的機縁は、生成の過程としての世界から始現し、そこで現成する。その意味で現実的機縁は創造されるものである。その創造の主体も成果も世界それ自身ではなく、諸多の新しい機縁である。生成の過程としての世界は、そのつど生成のユニオン (Union of Becoming) として成立している。生成のユニオンとしての世界ないし宇

宙は、そのつどそれに適した時節機縁 (Epochal Occasion) をもち、宇宙時 (Cosmic Epoch) として成立している。「今ここ」は、そのつど新しい自己創造の生成である。自己同一化と自己多様化とは、創造的自己限定の両面である。自己限定は、この二つの逆方向の同時同一の出来事として成立している。現実の世界は、一方では諸多の機縁すなわち多様な対照によって構成されているという意味で「多」として成立し、他方では諸多の機縁すなわち多様な対照が相互につながり全体的にまとめられているという意味で「一」として成立している。「多としての世界」は同時に「一としての世界」であり、世界は「一」が「一即一切 (One which is All)」として成立しているのである。

ホワイトヘッドのいわゆる「経験」とは「多のなかの一」としての「一」の自己受用である。この自己受用としての経験の機縁 (Occasion of Experience) が、真にリアルな「現実的機縁」であり、宇宙論構成上の根源的基軸としての位相的原理 (topological principle) である。一々の機縁は自己受用即自己表現という仕方であり、それぞれ自分自身を超えたものにかかわっている。すなわち一々の機縁は、それぞれ自分自身の直接的な自己実現にとめながら、自分自身を超えている宇宙とかかわっている。このような超越と内在との接点としての関心の活動 (Activity of Concern) が、一々の機縁とし

ての経験であり、経験としての機縁である。「多から一へ」の時間的推移と「一から多へ」のそれとは、「経験の経験」として円環を構成しており、このような円環としての経験が、受用と表現との同時同一の出来事として時間的—空間的な円環の形をとつて現成する。このような時間的—空間的な円環は、それぞれの出来事がそれぞれ経験の事実として現成する「場」である。この場は現成した事実であり、経験の円環性の事実として顕現する。この意味で円環としての場合は、経験としての出来事であり、出来事としての経験それ自身である。しかも現実の世界は、多くの身現の機縁 (Occasion of Actualization) によつて構成されている。この身現の機縁は時節機縁として特定の時処における特定の出来事である。時節機縁は、それぞれ現実の世界の構成単位であるとともに、本性上すべての他の単位との相互連関において成立している。したがつてそれぞれの単位は、みずからのうちに全宇宙を映し出す小宇宙である。上述のように、ホワイトヘッドの哲学は、基本的には宇宙論的構成を旨指したものであり、その思索の基調はすぐれて宗教的である。しかもその宇宙論構成の位相的原理として、現実的統体としての現実的機縁を提示し、自然と人間との統一の見方の理論化を志求したところに、ホワイトヘッドの独創的構想力の卓越さが認められる。

ひるがえつて、弘法大師空海の (即身成仏義) に掲げられた

「即身成仏頌」のなかの即身の偈(「六大無碍常瑜伽 四種曼荼各不離 三密加持速疾顯 重々帝網名即身」)には、六大体大(生命)・四曼相大(象徴)・三密用大(加持)の体・相・用三大が円融無碍する根源的現実(曼荼羅世界)を「我即法界、我即法身、我即大日」(吽写義)の当体である「即身」の位格において現証するという、空海の独創的な「六大縁起」の現実的生命思想(「即事而真、当相即道」)の精要が、凝収的に見事に表現されている。

六大(地・水・火・風・空(色)、識(心))には、われわれの感覚や知覚の対象とならない、常住不変の法爾自然の現実としての「能造の六大」である。「法然の六大」と、われわれの認識の対象となりうる、生滅変化する縁起的現象としての「所造の六大」である。「随縁の六大」との区別が認められる。「随縁の六大」はわれわれの業煩惱によつて感得され、それと相随伴して縁起するのであるが、「法然の六大」は業煩惱を超越した諸仏諸菩薩の体性となる、離因縁・超觀待の不生不滅(本不生)の实在そのものである。しかも「随縁の六大」は「法然の六大」に依処しかつ不離の關係にある故に、六大を能生、四曼・三密を所生として一応の区別が成り立つとはいへ、それは本末・始終の如き開合の区別にすぎず、体・相・用の三大は三即一、一即三の關係であるから、所詮、能造と所造、能生と所生、法然と随縁、それらはすべて

即身において二而不二である。したがつて六大縁起とは六大そのままが諸法万有として顯現することであり、縁起の当体みずからが六大なのである。諸法万有を縁起的に創造している働きが六大であり、六大の活動は諸法万有の縁起そのものである。このように六大は諸法(あらゆる存在者)の体性であるから、六大は諸法の真理体(存在そのもの)としての法界であり法身である。したがつて諸法の縁起としての六大縁起は、六大法界または六大法身の具体的活動である。それは一者としての实在の自己限定としての多者ではなく、多者こそ無限定の実在そのものなのである。現実的經驗の具体相以外に眞実の世界(法界)はありえない。「六大法界体性所成之身(六大法身)」は、法界(物象的であると同時に覺証的である存在そのもの)の体性である六大から成る現実のわれわれの身体的自己(現存)として現成する。したがつて、眞言密教における性相常住の本体論的立場においては、凡夫衆生の現実の身体的自己(現身)は、まさしく「六大無碍常瑜伽」の当体、すなわち宗教的非対象化的主体(覺存)として即身の位格に立つものでなければならぬ。これこそ、諸法縁起の当相がそのまま眞実法界である(「即事而真、当相即道」という、生命の「事」の絶対肯定に立つ「果上表徳」の六大縁起としての曼荼羅世界觀の深理趣なのである。

空海の独創的な包括的現実生命の密教哲学は、六大体大

(理具)・四曼相大(顯得)・三密用大(加持)および「即」の三大(体・相・用)の響和的活動性(personal activity)の現証的基軸である即身(Representative Person)における生命の根源的直観の事態として、物象的・覺証的展開としての「本有」の世界観(曼荼羅世界観)と「修生」の実践(即身成仏―世

間成就)との統一の体系である。しかも、その統一の体系の構造的基軸をなす即身こそ、宇宙生命の象徴的曼荼羅世界の位相的原理(topological principle)なのである。「心身一如」および「個全一如」の当体である即身(覺存)は、「即(現・法)身」として、個的全の「法身(法界、法然の六大、根源的現実)」と全的個の「現身(世界、世間、隨縁の六大、日常的現実)」とに位相轉換する。「生命の円環」(拙著《即身の哲学》理想社刊、二八四頁参照)における「法身↑↓即身↑↓現身」の各↓印は、 Ψ として位相轉換する「即身の世界」の図式的開示である。「生命の円環」図式の「現身↓法身」は、四次元ないし準五次元存在である衆生の往相向上門として、生命の凝収三六〇度転回(正対応)としての「発心(回心、修生)」の位相轉換であり、かつ「法身↓現身」は、超次元実在である法身大日如来の還相向下門として、生命の拡散三六〇度逆転回(逆対応)としての「濟度(摂取)、本有」の位相轉換の徑路と方向を表示し、しかもその両者の往還相即する当体が、五次元存在としての全人的宗教的実存である即身(覺存)の位相な

のである。したがつて、法身大日如来の智体悲用の現証的当体である菩薩身としての覺存の「即(現・法)身」における「即法身」は、「上求菩提」の「成仏(智)」の位相であり、「即現身」は「下化衆生」の「化他(悲)」の位相であることが了解されるであらう。

既に述べたように、ホワイトヘッドの形而上学体系の基軸をなす現実的統体としての現実的機縁は、実体的なものではなく、過程的事象(出来事)的な世界を構成する究極的実在としての位相的原理であり、しかもそれは物理的「場」の焦点的座標の原点を形而上学的に一般化した、意識的主体から物理的物体におよぶ全実在的事物を包括する經驗的機縁なのである。ホワイトヘッドが物心一如的な世界把握の方法を整理して形而上学としての宇宙論を体系づけたのに対して、空海は六大そのものである世界すなわち現身と、法界すなわち法身とを、即身を基軸として綜合統一することによつて、その独自の密教哲学体系を組織だてたのである。しかもその即身こそ、「金胎不二」、「色(物)心不二」の覺体である法身大日如来の自内証そのものとしての宇宙生命の象徴的曼荼羅世界の位相的原理なのである。ホワイトヘッドにおける「現実的機縁」と空海における「即身」とを比較哲学的に考察するとき、思想史的状況(時―処―位)の相違にもかかわらず、その構想に興味深い類似性が認められる。